どうして円高・円安になるの？

どうやら経済学のイロハからすると、次のようになるそうです。

まず、「円高」とは、「円の価値が上がる」ということであり、多くの人が、ドルから円に換えたがれば（つまり円をほしがれば）円高になり（価値があるお金を、誰でもほしがりますよね)、逆に「円安」は円の価値が下がることで、円からドルに換える（つまり、円はいらない、ドルがほしいということ。価値のない、いらないものは手放します）人が多くなれば、円安になります。

１ドルを１００円として、１１０円になれば円安、９０円になれば円高となり、円は日本でしか使えず(つまりアメリカでは使えない)、ドルはアメリカでしか使えない(つまり、日本では使えない）ということです。基軸通貨は「ドル」であり、日本とアメリカが貿易をする場合、通常は「ドル」で決済を行うことが多いため（勿論契約によって、支払いは円で行うことも可能ですが)、ドルを中心に考えることを確認しておく必要があります。

一般には「円安が続けば、円高になる」、逆に「円高が続けば、円安になる」といえます（勿論、いろいろな政治、経済の状況によって、必ずしも理論どおりにはなりません)。

円安（１ドル１１０円として）になれば、日本の輸出業者は有利となります。例えば、１ドル分アメリカに品物を売れば、１１０円日本の業者にお金が入りますが、円高状態（例えば、１ドル９０円ならば）では、９０円分の収入しかありません。ですから、円安の方が、日本にとって有利なので、それではどんどんアメリカに品物を売る（つまり輸出）するとどうなるでしょうか。

アメリカに品物（例えば日本車）を売れば、アメリカ人から「代金」を払ってもらう必要があります（当たり前ですよね)。ところが、アメリカのお金は、ドルですから、ドルで払ってもらっても、日本では使えません。そこで、アメリカに輸出した日本の業者は「受け取った代金のドルを、円に換える」必要が出てきます。つまり、「ドルはいらない、円がほしい」ということであり、結果的に円の価値が上がる、すなわち「円高になります」。

つまり、「円安の状態のときに、円高が起こる要因となる」と、経済学の理論としては、理解してください。

逆に円高（１ドル９０円として）のときは、日本の輸入業者が有利になります。１ドル分アメリカから品物を買っても９０円支払えばよいからです（１ドル１１０円という円安状況ならば、１１０円お金を払う必要があります)。ところが、アメリカから、品物を購入すれば、当然アメリカ人にお金を支払わなければなりませんよね。アメリカ人は、当然ドルをほしがるわけです。ですから、日本の輸入業者は、アメリカ人にドルを支払うため、「円からドルに換える」必要が出てきます。すなわち円は要らない、ドルがほしい→円安となります。

つまり、先ほどの逆に「円高の状態のときに、円安が起こる要因になる」と、経済学の理論では説明できるでしょう。

ちなみに、どうやって、例えば１ドル１００円と為替が決まるのかというのは、ドルと円の需要と供給で決まるといってもいいですが、

子どもさんには、「マクドナルド指標、或いはハンバーガ指標」という決め方もあるよと教えてあげるのもわかりやすいでしょう。

つまりマクドナルドのハンバーガの同じ商品の日米の価格で、１ドルいくらかを決める考え方もあります。

「マクドナルドのビックマックのハンバーガーが、例えば日本で、３６０円として、アメリカでは３ドルだとすると、１ドル１２０円とする」といったように、日本とアメリカの同じ商品の価格から、１ドルいくらかを決定するという方法もあります。

このビックマック指標、あるいはハンバーガ指標というのも子どもには教えやすい方法の一つです。